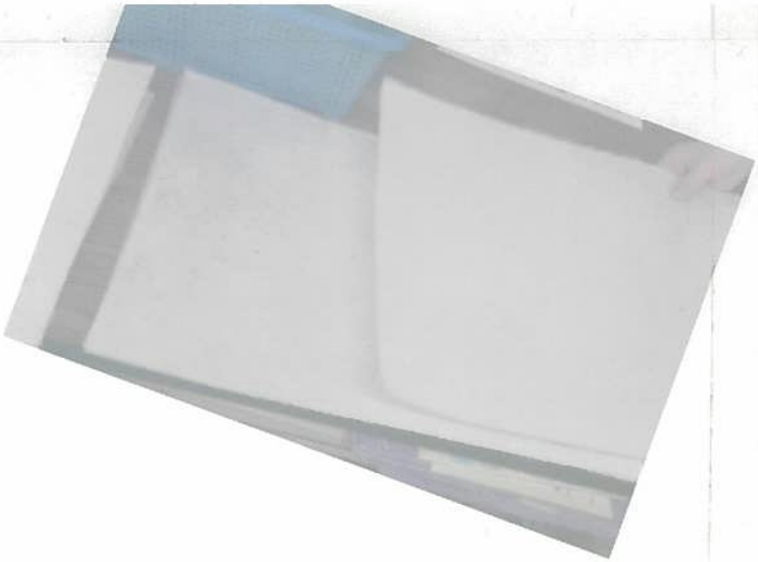
愛知の伝統工芸をたずねて
筆と硯と和紙とワタシ



渡邉奏萌

目次

1、はじめに …①

2、日本の書道のはじまり …②

3、文房四宝 ―弘法も筆を選ぶ …④

(1)筆について …⑥

(2)墨について …⑦

(3)硯について …⑦

(4)紙について …⑧

4、愛知の伝統工芸に挑戦！ …⑨

4－1、書道筆 ―豊橋筆― …⑨

4－2、硯石 ―鳳来寺硯― …⑮

4－3、書道和紙 ―小原和紙― …⑲

5、いよいよ作品を作る …㉔

6、まとめ …㉖

参考引用文献

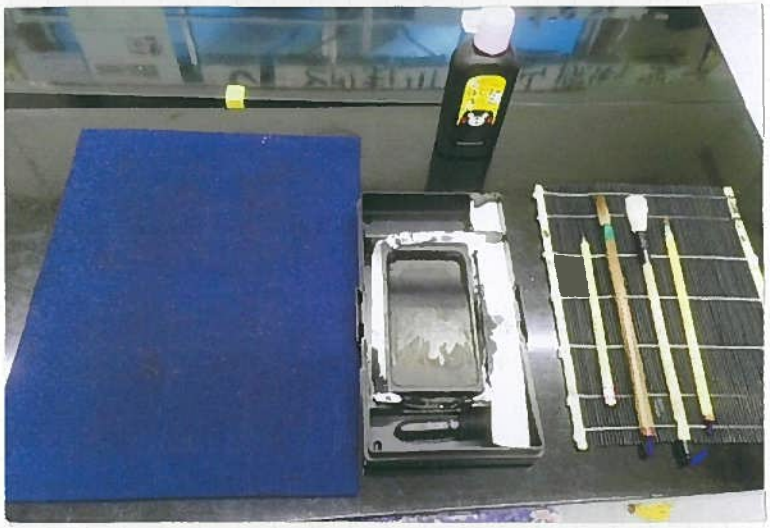
参考引用web

参考資料

お世話になった方々

1、はじめに

私は、5歳の時から書道を習っています。中学生になった今は仮名文字や行書も習い始めました。字を書くには、様々な道具をそろえる必要があります。



私が普段使っている習字道具(私撮影)

私が日々慣れ親しんでいる書道は、はるか昔、中国から入ってきた文化であり、現在も書く技術だけではなく、道具を作る技術も受け継がれています。

『字を書く』ために必要なものとして欠かせないものは“筆”と、“硯”と“紙”です。筆は、書きたい書体や字の大きさによって、様々な筆を用います。紙も同じように様々な紙があります。現在、墨汁はすでに作られたものも販売されていますが、今でも作品を作るときなどは、磨る“墨”と“硯石”で自分の好みの濃さに磨ります。

私が住む愛知県には、「豊橋筆」を呼ばれる筆と、鳳来寺山から採れる石で作られる「鳳来寺硯」、そして「小原和紙」と呼ばれる書道にも使える和紙が作られています。

私がこの先も書道をたしなむのに欠かせない習字道具を、今回は「豊橋筆」と「鳳来寺硯」、「小原和紙」を通して、書道の長い歴史の一部に触れてみたいと思います。

漢委奴國王印

2、日本の書道のはじまり

日本の書道のはじまりは、古代、文字の渡来とともに始まります。日本最古の文字の使用は、日本の歴史でも習った『漢委奴國王』印や中国の古銭の出土品です。どれも日本国内で出土しているものですが、それが日本人によって彫られた字であるかは不明で、渡来人によって製作されている可能性もあります。

日本人によって書かれた字だと分かるには、日本の言葉が記されていればいいわけですが、そういったものはあまり多くは残っていないようです。したがって 日本の言葉を記録した古い遺品としては、

大陸に比べ、文明、文化が発達していない日本は記録を残すという考えは古事記が口承されていたことからもわかるけど、書物などにして残す技術はなかったんだね。

① 江田船山古墳出土の大刀（熊本県玉名市、438年製作）
② 隅田八幡神社に伝わる人物画像鏡（和歌山県橋本市、443年製作）
③ 稲荷山古墳出土の鉄剣（埼玉県行田市、471年製作）

があります。これらはいずれも国宝で、漢字の音を利用して日本語表記で記されていると言われています。

※①～③は3ページ写真を参照

①東京国立博物館HPより

③埼玉県さいたま史跡の博物館より

②レプリカ
神社人HPより

仏教が大陸から取り入れられたのと同時に経典が入ってきて、写経するために文字を理解し、その働きも理解しようとする物が増えてきて、文字が定着していったものと考えられます。例えば7世紀に活躍した聖徳太子は「法華経」「勝鬘経(しょうまんぎょう)」「維摩経(ゆうまきょう)」の三部についてその注釈本を記すなど単に文字が読めるだけでなく、その内容に関わるほどの深い知識を有していたと言われます。

写経活動が活発になるのと同時に漢字の音を利用して、仮名のように読む万葉仮名が一般化していきました。これは、草書体からやがて仮名の形が生まれる前段階です。平安時代になると、奈良時代に比べ、中国文化の影響がやや薄れ、国風文化が生まれてきます。その中で、書の世界でも、三筆といわれる日本の中での書の達人が生まれてきました。空海、

仏教が入ってきたことで、日本は文字を獲得して、万葉仮名や仮名まで獲得した！文化が伝わることで、日本の生活は本当に変わったんだね。

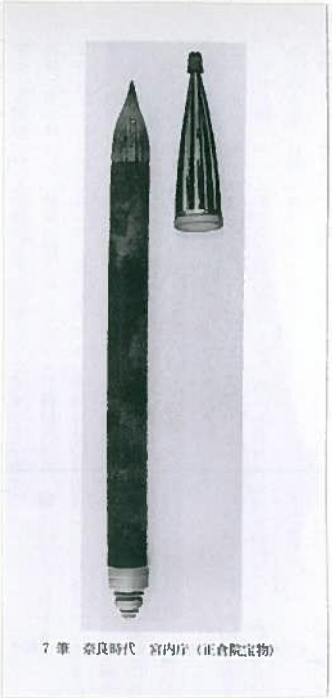
橘逸勢、嵯峨天皇です。三筆に最澄を加え、本家(中国)に負けない書を残すような人たちです。平安時代の初めの1世紀は万葉仮名から仮名(ひらがな)が生み出された時期でもあります。日本の書道の歴史は日本の歴史同様、正倉院の存在が大きく、正倉院の中に保存されていた書道の道具がたくさんのことを教えてくれます。

3、文房四宝 ―弘法も筆を選ぶ―

さて、書道には必ず道具が必要で、「弘法筆を選ばず」ということわざがあり、名人の域に達していれば道具はどんなものであろうと関係なく、自分本来の能力を発揮して立派な仕事ができるという意味です。しかし、一流の書家でもあった九大路雷山人という人は、書の上達方法をたずねられると、「いい道具を使うことだ」とアドバイスしたと言うことです。ことわざにもなっている弘法大師空海自身も、実は筆にはこだわりを持っていたという記録があるそうです。空海は、唐にいた頃に、狸毛筆の製法を学び、帰国後には筆匠を指導してその筆を作らせたということです。

でも、一説には空海ほどの人に悪い道具を渡して書かせるわけがないので、空海が使っていた道具はどれもいいものだったという話もあるみたいだよ。確かにブルトク!

そのような書道具は、正倉院に現存しています。筆と墨と紙で、写経のためや大仏開眼のために使われたようです。



7 筆　奈良時代　宮内庁（正倉院宝物）

← 正倉院の筆

正倉院の筆 →

「書」で解く日本文化
(2004)より

8 天平宝物墨　奈良時代　宮内庁（正倉院宝物）

筆の毛の素材には、うさぎ、狸、鹿があります。正倉院には現存はしていませんが、羊やきつねの毛の筆もあったようです。また、筆のふたがあったり、金をあしらうような豪華なものもあれば、飾りのない素朴なものもあったそうです。これらの筆は大仏開眼会で用いられたということで、大字を書く以外に使いようのない筆ということですが、今ではそれで十分であまり派手な筆はありません。

墨も30センチ近くの大きなものもあり、墨の形は残っているものはいずれも舟形で現在私達が使っているような角型とは異なります。正倉院にあった墨は唐墨の他に、新羅製の墨もあり、なんと日本製の墨もあると推定されているようですが、墨の成分が分析されていないので、正確には不明だそうです。

でも、ほんの少しを削って分かるのであれば、是非分析して欲しいです！ただ、貴重なものなのでやはり事は慎重に運ばないといけないけど。

また、正倉院は紙も残されていて、正倉院の文書や、未使用の紙もあったそうです。

今は、書道は紙に書くのが当たり前という気もするけど、何に書くか？という歴史は石→木簡や竹簡→紙という感じで流れていくよ。

―文房四宝とは―

弘法も筆を選んだということですが、選んだのは筆だけでしょうか。きっと、紙や硯、墨も選んだことでしょう。

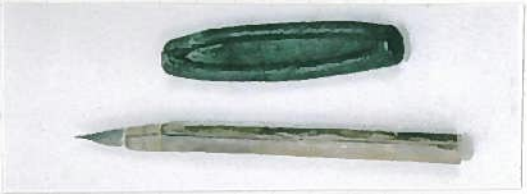
筆、墨、硯、紙は「文房四宝」と呼ばれ、古くから重んじられてきました。もともと、文房とは、中国で生まれた言葉で、文人の書斎のことを指す言葉でした。文房四宝である筆、墨、硯、紙は、書斎で詩文や書画を製作するための道具類のことであり、これを文房具と呼んだのです。しかし、今は鉛筆やシャーペンがいわゆる文房具になっていて、書道の道具は、書を書くための特別なものになっています。この筆、墨、硯、紙は、いつ頃誕生したのでしょうか。

(1) 筆について

筆の起源については、紀元前1600年ごろの甲骨片に筆を用いたと思われる文字が書き残されていて、中国の殷代から筆があったことが知られています。その後、紀元前200年ごろには、中国の蒙恬（もうてん）という人が発明したと伝えられました。この筆は、穂の中心に鹿の毛を遣い、まわりを羊の毛でおおって、枯木にはさんで作ったようです。筆はもっと前から発明されているので、蒙恬という人は改良したのだという考え方が適切と思われます。

日本にいつ筆が伝来したかは定かではありませんが大宝年間には「造筆手」を置いたとあり、国内で筆が作られていたことがわかっています。正倉院の筆がやはり最も古いのです。また、さきほど書いたように812年には空海が筆を輸入し、遣筆法により天皇に献上したと伝えられています。　一方、胞衣壺（えな）という子どもの成長を願い用いられた壺に筆や墨が一緒に埋葬され、8世紀半ばの筆や墨も残っています。胞衣とは人間の胎盤のことで、男の子であれば筆や墨、女の子であれば針や糸を埋葬したそうです。このよう

な壺に入っていたからこそ、何とか現存していたようです。



（左、胞衣壺出土の様子、一宮市博物館パンフレットより）

（上、筆と墨のレプリカ、一宮市博物館パンフレットより）

(2) 墨について

甲骨片に筆で下書きされたと思われる朱や墨の跡が残っていることから、墨の存在が推測されますが、それがどういう状態のものであったかは、分かっていません。

最古のものとして、秦（紀元前221～前202）の墓から石硯・磨石とともに出た墨が確認されていて、硯と石の間に墨片を挟み、潰したり、練ったりして使われていたようで、初めは天然の石墨（墨鉛）を用いて次第に煙煤を小さく丸く固めたようなものになっていたと考えられてます。

日本の墨作りは、文献上は推古天皇の610年に紙墨の製法が伝わったとありますが、それ以前から墨は使われていたということです。大陸の製法をもととしながら、日本の気候風土に合わせて原料や製法が工夫されてきていましたが、明治あたりまでの墨は、中国の墨より品質的に劣っているとのことです。

愛知県には墨の名産はありませんが、隣の三重県では伝統工芸品に指定されている鈴鹿墨があります。

(3) 硯について

中国の西周（紀元前1122～前770）の墓から長方形の石板調色器が出土していますが、最古のものとしては、墨と同じ秦の時代に素朴な石硯です。

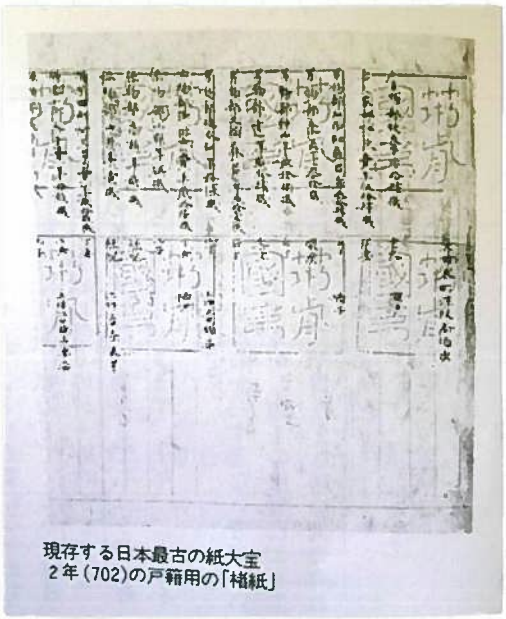
日本では平安時代あたりまで、ほとんど陶硯が使われていました。陶硯とは、陶磁器で作られた硯です。日本では各地で陶器に適した土が多く採れたので、陶硯が発達していたと思われます。平城京周辺にたくさんの陶硯が出土しています。中国で硯文化が花開いたのに対し、日本では硯に対する関心が高まらず、写真の中心にあるような円面硯が多かったそうです。室町時代の終わり頃になってようやく石の硯を作り始めましたが、実用性のあるものでした。

平城京より出土した陶硯
(一宮市博物館パンフレットより)

(4) 紙について

紀元前3世紀のエジプトのパピルス紙が、歴史上最古の紙として有名ですが、これは植物繊維をそのまま縦横にして重ねただけのもので、紙の原形といえます。

中国では古来、蔡倫(さいりん)という人が紙の発明者だと伝えられてきました。樹皮や麻くず、ぼろ布等を石臼で砕いて水に放ち、それを漉き取って紙を作ったといい、今日の製紙法のルーツをここに見ることができます。しかし、前漢時代(前202～8)の紙出土が確認されたことから、蔡倫は紙を発明したというより、すぐれた製紙法を考案した人だと考える方が妥当になりました。以後、簡便な書写材料として紙が普及しているのです。



現存する日本最古の紙大宝2年(702)の戸籍用の「楮紙」

季刊墨スペシャル第26号(1996)より

文献上では、推古天皇18年(610)に高句麗の工芸僧、曇徴によってその技術が伝わったとありますが、それ以前に伝来していた可能性は高いと思われます。

現存する最古の紙は、正倉院に残る大宝2年(702)の戸籍用の楮(コウゾ)紙です。

平安時代になると、大陸伝来の"流し漉き"という画期的な方法が編み出されました。現在もほとんどの和紙がこの方法で漉かれています。国風文化が花開いたこの時代は、かなの発達とともに華麗な料紙も多く作られました。

4、愛知の伝統工芸に挑戦！

書道に必要とされる、文房四宝ですが、なんと私の住む愛知県ではそのうちの3つ、「筆」「硯」「紙」が今でも作られ、受け継がれています。筆は「豊橋筆」、硯は「鳳来寺硯」、紙は「小原和紙」です。

4－1、書道筆 －豊橋筆－

豊橋筆の起源は、文化元年(1804)にさかのぼります。京都の鈴木甚左衛門が吉田藩(豊橋)学門所の御用筆匠に迎えられて以来、鈴木家が代々同学門所の製筆御用を難めてきたのです。原料が容易に入手できることもあって、以来、下級武士の間に副業として筆づくりが盛んになってきたそうです。

明治に入って、教育が普及すると筆の需要が著しく増加してきました。そして、芳賀次郎吉が東京に出て、現在の筆の技術術を習得、その弟子、佐野重作が多くの弟子を養成したことで、今日の豊橋筆の基礎を作ったと言われています。

今回、豊橋市嵩山町で嵩山工房をやっている伝統工芸士の山埼亘弘先生をたずねました。

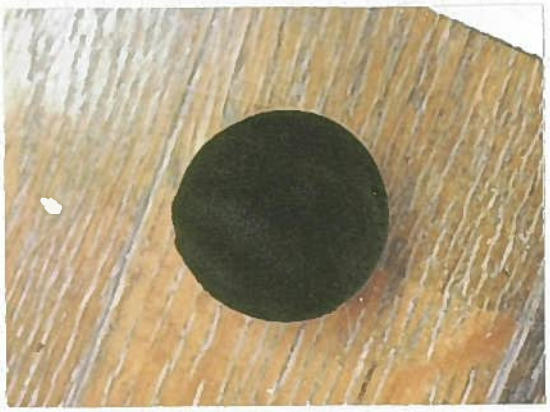
伝統工芸士の山崎亘弘先生(母撮影)

日本の筆の名産地は呉市、奈良市、熊野市などがありますが、実は、呉市の豊橋で作られたものが多く使われているそうです。今まで豊橋筆というブランドではなく、無印でいろいろなところに出荷されていたそうです。また、京都と奈良では穂の長さが違うそうです。

それは用途が異なるためで、京都は飾り物として用いるために穂は短く、奈良は写経など書き物をするために穂先は京都に比べれば長く、墨が長持ちするようになっているそうです。実は、豊橋筆は全国の4分の1程度の筆を作っているとのことです。

豊橋筆は親方制度といって、親方に注文が入って、親方のところに穂を作っていき、親方のところで、穂を筆管に差し、商品にします。今でもその親方制度は続いています。嵩山工房さんは師匠の親方から工房を継いだそうです。

さまざまな毛で筆はできていますが、値段がいいものは、作り方は同じでも材料が違うそうです。昔は工房の周りでもイタチや狸が走っていて、獲って筆の材料にしていましたが、今は動物愛護のため、日本では毛を獲ることはできず、中国からの輸入が多いそうです。また、昔に比べて酸性雨など環境が悪くなってきて、「コシ」が立たない毛が多くなってきているそうです。そのために、筆の穂の真ん中にはナイロンの毛が入るようになってきているそうです。全てナイロンの毛でできているのが、私達もよく知っている「筆ペン」です。


ナイロンの毛（私撮影）

筆の穂によく使われるのは、イタチ、狸、馬、猫、ヤギなどです。中には最初から筆の穂の長さが揃えられているものもありますが、全て手作業で行われます。一番柔らかい毛はヤギの毛といわれていますが、一番いいところの毛は首元だそうです。

伝統的工芸品　―5つの要件―

- 主として日常生活に使われるもの
- 主要工程が手作業で製造されたもの
- 伝統的な技術や技法によって製造されたもの
- 伝統的に使用されてきた原材料を使っているもの
- 一定の地域に生産者が集っていること

伝統工芸品のマーク

手作業で行われ、ナイロンの毛が1本も入っていないものだけが、伝統工芸品のマークを付けることができます。でも、このような毛の長さをそろえたり、中心に腰のある毛をもってきて穂を整えたりという作業はとても大変なことです。

筆作りには細かく36工程あると言うことですが、私は途中から作業を体験させていただきました。

〈豊橋筆の作り方〉

① 原毛選別

原料となる毛から、毛丈の長さや毛の良し悪し等、目と手で選別を行う。

刹った毛が盛りだくさん（私撮影）

イタチのしっぽ（私撮影）

② 煮沸・毛抜き

その後、毛に残っている脂をとるために煮沸し、乾燥させた毛に金櫛（かなぐし）を用いて、綿のついている毛などを完全に抜き取る。

毛をそろえる（私撮影）

そろえた毛（私撮影）

③ 毛揉み

毛揉みとは籾殻を焼いて作った灰をまぶして、鹿の皮を巻いて両手で強く揉む工程です。強く揉む回数は1度に200回はやるそうです。こうすることで脂分が除かれ、墨の吸収がよい筆を作ることができます。

この灰を毛揉みに使う（私撮影）

毛揉み（私撮影）

中には注文によって左の写真のように3種類の毛で筆を作ることもあるそうです。これなら3方向から書くとすべて筆質が違います。

ヤギ、イタチ、馬の3種類で作られた毛（私撮影）

④櫛上げ・寸切り

毛先をそろえ、毛がからみ合ったり折れ曲がったりしないよう、丹念にすきます。その後、一定の大きさに切った板をあてて、その長さに毛の長さを合わせていきます。

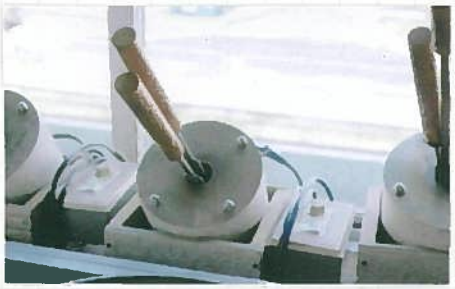
この工程は当日見られなかったのでパンフレットから抜粋（一宮市博物館パンフレットより）

⑤練り混ぜ・さらい・芯立て

別々に処理・加工してきたさまざまな種類の毛を混ぜ合わせる工程です。命毛、のど毛、こし毛の毛を10等分にし、混ぜ合わせます。この毛を練り混ぜていく作業は豊橋筆の特長です。これをきちんと行うので、墨含みが良く、墨はけが遅く、書道には適しているそうです。そして再度金櫛ですきながら毛先の悪い毛を取り除いていきます。できあがると、芯立てといって、芯1本分の大きさにわけ、こまといわれるものに差し込んで芯ん形につくりあげ、乾燥させます。

この工程は“さらい”で、左の写真では毛がばらばらだが、右の写真では毛先がそろっている。（私撮影）

⑥上毛かけ・尾締め



この工程は当日見られなかったのでパンフレットから抜粋
（一宮市博物館パンフレットより）

芯立てでできた芯に化粧毛を外側に薄く巻きつけて乾燥させます。これをすることで、自然とふくらみのある穂先ができたことで、自然とふくらみのある穂先ができるそうです。軸には、竹や桜や紫檀などを使用するそうです。乾燥させた穂の根元を麻糸でしばります。麻糸を使うのも豊橋筆の特長です。

⑦仕上げ

ここからは、私も体験させていただきます。

穂と軸を接着させ、乾燥させた後、煮溶かしてあるふのりを混ぜ込む作業です。最初に筆にふのりがよくなじむように、毛で筆を慣らします。根元まで柔らかく筆が曲がるように確認します。次にふのりを付けます。これも根元までのりを入れないと形が整わないので、しっかりなじませます。ふのりをしっかりつけたら、今度は櫛で毛を整え、余分なふのりを取り除きます。

筆を慣らす（母撮影）

ふのりを付ける（母撮影）

巻きつけた麻毛を回しながら余分なのりを取り除きます。さらに穂の形を整えます。

櫛で整える(母撮影)

麻糸でふのりを搾る(母撮影)

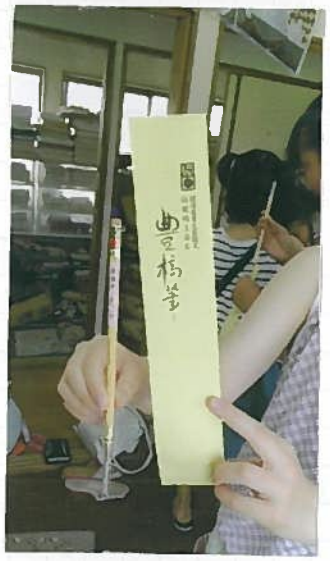
⑧ 完成 (刻銘)

あとは形を保管するために鞘付け(筆のキャップ)をしたら、完成です。今回は体験だったので、すぐに鞘付けをしてしまいましたが、本当は2日間ほど乾燥させてから鞘を付けるそうです。私も家に帰ったら、キャップを外して乾燥させました。

伝統工芸品として、展示会などに出品するときは、刻銘をして出来上がりです。

鞘を付ける(母撮影)

出来上がり(母撮影)



筆には伝統工芸のシールを貼り、
豊橋筆の封筒をもらったら、本物みたいです!!
(母撮影)

4－2、硯石　－鳳来寺硯－

今回、鳳鳴堂硯舗の名倉鳳山先生に硯の勉強をさせていただくことになりました。鳳山先生は、日本伝統工芸展で日本工芸会奨励賞を受賞されています。それは硯の分野では初めてのことで、その硯は文化庁の買い上げにもなっています。有名な書家もここに尋ねてきて先生の作品をもとめていかれるそうです。

硯を体験するためには、硯石になる石を採石してこなくてはなりません。それはとても難しく、貴重な石なので、話を聞くことと、硯作りの実演だけを見せていただくことになりました。

鳳来寺山ニノ門を奥に走ってしばらく行くと鳳鳴堂さんが見えてきます。

玄関には鳳来寺硯の由来が書かれていて、歴史を感じました。

←鳳来寺山ニノ門（母撮影）

←↑鳳鳴堂硯舗玄関（私撮影）

鳳来寺硯は新城市（旧鳳来寺町）門谷で作られている硯ですでに1300年以上の歴史があります。

盛んに作られるようになってきたのは明治20年ごとからですが、始まりは、702年に利修仙人が開山したことから作られているといわれ、それからは1300年の時間が経っているのです。現存している最も古い鳳来寺硯は長篠城から出土した430年前のものだそうですが、江戸時代には参勤交代で立ち寄った大名たちで栄え、鳳来寺山の参拝の帰りに土産物として多く利用されたそうです。特に鳳来寺山から採れる金鳳石は、江戸時代の文献『和漢研譜』にも記された上質の硯です。しかし、明治に入る頃には長いい歴史をもつ硯づくりも衰退していきました。

説明してくださる鳳山先生と私
（鳳山先生右下、母撮影）

学校教育の普及とともに硯の需要も増え、場所を変えて硯つくりを始めたそうで、現在では鳳来寺山で硯を作っている家は2軒だけになっています。

鳳来寺硯の特長は鳳来寺山から採れる石でできたもので、金鳳石、鳳鳴石、煙鳴石、煙厳石の三種類で作られています。

金鳳石の原石と作品

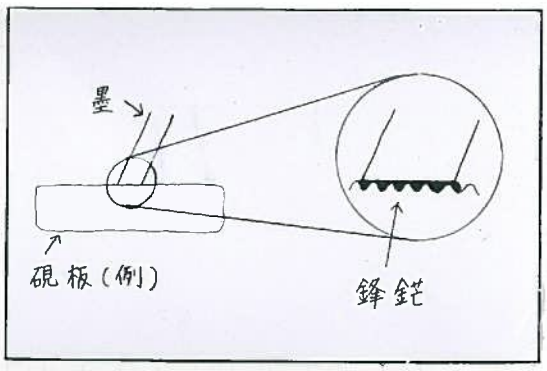
鳳鳴石の原石と作品

煙厳石の原石と作品

（石の原石と作品はいずれも、鳳鳴堂硯舗HPより）

硯は、墨をすったり、毛先を整えたりする面を墨堂（陸（おか））、すった墨を溜めておく墨池（海）とに分かれています。陸である研面には鋒鋩という細かな凹凸があり、石質が密で墨が良く伸びるものが良硯とされています。

鳳鳴堂さんで見せてもらった硯（妹撮影）



硯と墨と鋒鋩の関係
（鳳山先生の説明をもとに私が作図）

〈鳳来寺硯の作り方〉

① 採石

一宮市博物館
パンフレットより

鳳来寺山から硯に適した石を採石してきます。採った石は何十年も直射日光の当たるところにさらしておきます。ダメな石はパリパリと割れてきてしまうそうです。硯に適しているものはひびも入らない石で、採ってきた石の数パーセントにしか過ぎないそうです

② 石取り

くさびを使ってハンマーを割ったり、ダイヤモンドカッターで石を切断しておおよその四角形を作ります。

一宮博物館パンフレットより

③ 平板作り

タガネやノミで削り、石の上下を平らにして厚さをそろえます。

一宮博物館パンフレットより

④ 荒削り

デザインに合わせて線を入れて、ノミで外形を削ります。

← 両方とも私撮影 →

⑤ 緑立て

墨堂と墨池をノミを使って削ります。

一宮市博物館
パンフレットより

⑥ 内掘り

墨堂と墨池を掘ります。上半身を使って掘るため、硯をつくる人は腕の付け根にタコができるそうです。

一宮市博物館パンフレットより

⑦ 磨き

普通、この作業を行うには3種類の砥石を使います。また、砥石だけではなく、

上：砥石で硯に磨きをかけている

左：紙やすりについて説明してくださる鳳山先生。
足元には製作中の硯とたくさんの砥石がある。

何種類もある砥石。手前にはたくさんノミが何本もある。
（私撮影）

はなく、何種類かの紙やすりも使って形を整えていきます。砥石も紙やすりも同じ目の粗さでも様々な素材のものを用意します。それは、硯との相性があるためです。

⑥ 仕上げ

最後に艶出しをするために漆を塗りこみます。塗るのは硯の周りです。漆を塗ることで、硯の風化を防ぎ割れにくくします。

試しすりの様子
（妹撮影）

最後に必ず忘れてはならないのは、実際に墨をすってみることです。硯は墨をするためにあるので、墨がすりにくかったり、思った色が出ないといけません。

注文で硯を作るときには、墨堂のどの部分を荒く、どの部分は細かくと、細部にわたったりクエストが入ります。そのように作れているか試すのだそうです。

4－3、書道和紙 －小原和紙－

豊田市小原地区（旧小原村）に小原和紙の作家さんがたくさんいます。小原で和紙づくりが始まったのは、およそ500年前の室町時代からだそうです。その当時は隣の旭地区にやってきた柏庭（はくてい）和尚が冬の仕事として「紙すき」を教えてくれたそうです。これが小原和紙の始まりです。

旧小原村は標高300～700メートルの山間部で、水がきれいで豊富なのに加え、きめ細かな紙を作るのに欠かせない「冬の寒さ」があったことが大正末期まで全村が紙すきを生業とし、紙の村として栄えさせました。しかし、明治時代に30軒ほどあった紙すき農家も、近代化とともに紙が機械で作られるようになり、戦前頃にはそのほとんどが消滅するのを余儀なくされたのです。そこで、昔ながらの手すき和紙農家の人たちは、伝統の紙すきを守ろうと苦労していました。

この小原和紙を和紙工芸として復活させたのが、藤井達吉翁です。藤井翁は戦時中、疎開してきて小原和紙と出会いました。

小原和紙が良質なのに着目し、この伝統ある村の和紙をこのまま朽ちさせるにしのびないと、和紙の美術化を考案し、村の青年たちを集めて、美術和紙工芸品の制作を創めたのです。

福岡先生に和紙の話を聞く（母撮影）

藤井翁は、小原の紙すき職人たちに染色などを教え、美術工芸品としての和紙を漉くように指導しました。昭和20年には小原村に移り住み、若者を中心に美術工芸の大切さを教えました。若者たちは「自分のためではなく、子孫のために小原文化を発展させよう」という藤井翁の言葉を信じ、展覧会に入選するなどして小原工芸和紙の基礎を築きました。

現在小原では、額絵、襖、屏風、団扇（うちわ）、灯りなどが制作されています。これらに施される絵模様は、繊維を染め、絵を漉く段階で描かれるもので、和紙特有の美しさをもちます。

私は和紙工芸作家で、書道紙も漉くという福岡小次郎先生をたずねました。

福岡先生は20名ほどいる工芸を教えに行ったりと、世界を股にかけてお仕事をされています。先生の話を聞いた部屋は和紙に囲まれた部屋で、灯りも襖も額絵も和紙で作られ、その作品の手の細かさに圧倒されました。そして、先生に和紙には「流し漉き」と「溜め漉き」があること、藤井翁とは幼少のころにしか会ったことがないが、今でも藤井翁の出身である碧南市と交流があることや、小原和紙を認めてもらうために、いろいろなところにお願いに行ったことも教えていただきました。話の中で私がすごいことだと思ったのは、現在の天皇陛下が皇太子のころに、福岡先生は小原和紙を紹介する役目をしていたことです。

福岡先生の作品
（名古屋トヨペット、豊田御立店、母撮影）

〈小原和紙の作り方〉

① コウゾの刈り取り

和紙はガンピ、ミツマタ、コウゾなどの皮の繊維を使いますが、小原和紙はコウゾを使います。

コウゾの刈り取りは毎冬に刈り取り、枝を切って長さをそろえます。そのあと、『カンゾカシキ』といって、コウゾを大きな束にして、コシキという蒸器に入れ、2〜3時間蒸します。蒸し終えたコウゾから皮をはぎとります。

この作業は冬に行わなければならず、私は今回体験することはできませんでした。そして、普段、コウゾは乾燥して保存しています。

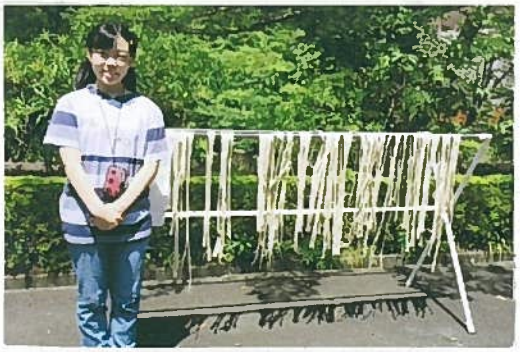
コウゾの木
（和紙工芸館展示、私撮影）

コウゾを乾燥して保存してある（私撮影）

② タクリ（黒皮取り）

保存してあるコウゾを水で戻して、皮をはぎとる作業をタクリといいます。タクリをしたあとは、コウゾを干します。これも一年間コウゾで和紙を作るための大切な保存方法です。

タクリ作業（私撮影）



← コウゾを干す（母撮影）

③ アルカリ液で煮る

白皮になったコウゾを水で戻して、ソーダ灰などのアルカリ液で柔らかくなるまで煮て、アクを取ります。

水で戻しているところ。もう、アクが出ている(私撮影)

④ ちり取り

煮終えた皮を水でよく洗い、アルカリ液を流した後は、皮に残った不純物を手で取り除いて、きれいな皮にします。

(私撮影)

⑤ 叩解(こうかい)

(母撮影)

ちり取りの済んだ皮を木の棒で叩きほぐし、綿のように細かくします。だから叩解というのですが、今は機械化が進んで、専用のミキサーで細かい繊維を作ります。

(私撮影)

⑥ ネリづくり

トロロアオイを絞る妹（私撮影）

トロロアオイは、コウゾの繊維のつなぎとして使います。トロロアオイの根を叩いてつぶし、木綿袋に入れてよく絞ると、ネバネバのシナが垂れてきます。

ネリづくり（母撮影）

⑦ 漉（す）く

トロロアオイの液と叩解した繊維を混ぜていよいよ漉きます。今回私が挑戦したのは、「溜め漉き」です。

（私撮影）

（母撮影）

⑧ 乾燥させる

漉いた紙をいよいよ乾燥させます。本来ならば、天日干しですが、今回は時間短縮で、専用の和紙乾燥装置を使います。

（私撮影）

⑨ 完成

1時間ほど乾燥させたら、できあがりです。

(私撮影)

余談ですが…

色水(下の写真)を作ると、右のような色が入った和紙が出来上がったり、不純物をそのまま残して漉けば、味のある和紙(右の写真の中段)を漉くことができます。

コウゾの入っ色水(私撮影)

さまざま和紙(和撮影)

5、いよいよ作品を作る

これで愛知産の書道用意することができました。和紙と筆だけだけど、作品を作りたいと思います。夏休みは月例の作品以外のものも作ることが多いので今回はそれに挑戦します。和紙は自分で漉いたもの以外に福岡先生が冬に漉いていたストックをいただくことができました。それでも挑戦したいと思います。

最初に、私が漉いた和紙で書きました。本格的書道紙を漉いたのは初めてで、網目が荒く、あまり墨を吸わず、逆にほとんど弾いているような書き具合になりました。先生にこのような紙の場合は、『ゆっくりと墨が筆先に

下りてくるのを待って書く』とアドバイスしていただきましたが、私の腕では紙にしみ込み過ぎないようにスピード感を持って書くまでは至らず、にじみが大きく出てしまいました。しかし、和紙独特の風味が出ていたので良かったです。

作品を作っている私　(母撮影)

次に福岡先生からいただいた紙で書きました。私が漉いた紙と福岡先生の漉いた紙の最も違う点は、やはり墨のにじみ方です。福岡先生が漉いた紙は、よく墨を吸って、墨もあまり必要なく書くことができ、和紙の網目が細かく、筆の流れが良かったことを体感しました。作品の見た目でも違いは一目瞭然ですが、実際に書いた私は本当に書きやすい紙を漉くことがこんなにも難しいと改めて知ることとなりました。おかげさまで、いい作品ができたと思います。

私が漉いた紙
(私撮影)

福岡先生の漉いた紙
(私撮影)

※「聖恩」とは、天子の恩。天子の恵み、という意味です。

6、まとめ

今までの私は、書道のセットに対してなんの思いもなく使ってきましたが、今回、私の身近にある、書道をたしなむのに欠かせない筆、墨、硯、紙について調べることによって、それらへの見方が変わりました。

― 豊橋筆 ―

私は、時々墨が付いたまま洗わずに固まってしまった筆を無理矢理ほぐして使っているときがありました。でも、粗雑に使っていた筆は、40近くある工程を通ってきた、職人さん達が丹精込めて作り上げた素晴らしい筆だったのです。これからは、きちんと筆の手入れをして長持する筆にしていきたいと思います。私が体験させていただいた筆作りは、「ナイロンの毛」が1本も入っていない動物の毛だけで作るもので、伝統工芸品のマークを付けることができました。少しだけれど、自分で筆を作る工程を行って、時間をかけて一つの作品が出来上がることを知りました。あの場で簡単に形作ってはみたものの、家に帰って乾燥させるということができて初めて筆は乾燥することからも、「手間ひま」という言葉がまさにぴったりと合う作業でした。

― 鳳来寺硯 ―

鳳来寺硯は、今回私が訪ねた筆、硯、和紙の中でも最も古い歴史を持っていますが、実は、私は今回このように調べるまでは鳳来寺硯の存在を知りませんでした。今回は見学のみでしたが、実演を見せていただく中で、肩を使ってとても大きなノミで黙々と作業をしていく姿に、私は伝統はこうして静かに伝わっていくのだと思いました。硬い石相手にひたすらノミで削っていくことは並大抵ではないし、体重をかけて掘っているのにほんの少ししか削りカスが出ないのは本当に根気がいるし、貴重な石に対して失敗は許されないという緊張感が伝わってきました。

日本は中国みたいに派手な硯は作らないけれど、私も初めて鳳山先生の作った硯を見させていただいたとき、「曲面がきれいな硯だなあ」と思ったように、日本人が美しいと思う形で硯を作り続けることは大変です。

しかし、伝統や技を受け継ぐものがいる限り、鳳来寺硯は

続いていくと思いました。

―小原和紙―

私は、小学生の時何度か小原に来たことがあって、和紙作りの体験も何度かさせていただきましたが、そのときは、ただ単に楽しんで漉くだけでした。今回、私の知らない小原和紙の歴史を見ることができ、書道用に漉く事もできました。今では世界中に出回っている小原和紙の作品が、昔は消滅しそうになっていたなんて、思いもしませんでした。そんな時現れたのが小原和紙の救世主、藤井達吉翁でした。その当時、和紙職人の人達もなんとか復活させられないかと思っていたところだったので、藤井翁はまさに小原和紙のヒーローのような存在だったのではないのでしょうか。実際、私の目にはそう映りました。その後小原和紙は小原和紙工芸として栄えていきました。藤井翁がいなかったら、今の小原和紙工芸はなかったと、私は思います。

書道にまつわる道具の歴史を調べるだけでなく、実際に作る工程を見学させていただき、作る体験をさせていただきました。職人技と言われるものを少しでも教えていただき触れることができて、勉強にもなったけど、何よりも楽しかったです。いろいろ話を聞かせていただく中で、共通して出た話は後継者問題で、「こうしたすばらしい技も伝えて未来につなげていかなければならないが、なかなか難しい」ということでした。機械化によって職人技が絶えることがないよう、私たちが本当に良いものを使うということで微力ながら引き継いでいきたいと思いました。

参考引用文献

著者名	書名	出版社	出版年	図書館名と請求記号
日本放送協会 NHK出版	NHK　趣味Do楽 柿沼康二　オレ流　書の冒険	NHK出版	2012	個人所有
NHK「美の壺」制作班編	NHK　美の壺 文房具	NHK出版	2009	個人所有
名児耶　明編	日本書道史年表	二玄社	1999	豊田市中央図書館 728.21/ﾅｺﾞ
名児耶　明監	「決定版」日本書道史	芸術新聞社	2009	豊田市中央図書館 728.21/ﾅｺﾞ
石川　九楊	「書」で解く日本文化	毎日新聞社	2004	豊田市中央図書館 728.21/ｲｼ
為近磨登	墨と硯と紙の話	木耳社	2003	豊田市中央図書館 728.3/ﾀﾒ
	季刊墨スペシャル第26号 文房四宝の楽しみ	芸術新聞社	1996	豊田市中央図書館 728/ｽﾐ
	墨　2009年7･8月号 199号	芸術新聞社	2009	個人所有
岡崎信用金庫	あいちの地場産業		2008	個人所有
岡崎信用金庫	あいちの地場産業		2004	個人所有
わがみ堂	季刊和紙第8号	全国手すき和紙連合会	1994	豊田市中央図書館 A754/ﾜｶﾞ
伊藤喜栄編	東海の伝統工芸	中日新聞本社	1985	豊田市中央図書館 A750/ｲﾄ
愛知県教育委員会	郷土学習教材 愛知の伝統産業 豊橋筆　利用の手引	愛知県教育委員会	1983	豊田市中央図書館 A589/ｱｲ
続木湖山 小倉不折	書写なんでも百科9 筆はどうできてるの	岩崎書店	1991	豊田市中央図書館 728/　/9

参考引用web

webページを制作した人、団体名	webページ名	webサイト名	URL	アクセス年月日
埼玉県立さきたま史跡の博物館	埼玉県立さきたま史跡の博物館	埼玉県立さきたま史跡の博物館	http://www.sakitama-muse.spec.ed.jp/?page_id=334	2015/7/17
東京国立博物館	銀象嵌銘大刀（ぎんぞうがんめいたち）	名品ギャラリー	http://www.tnm.jp/modules/r_collection/index.php?controller=dtl&colid=J573	2015/7/17
一般社団法人国際教養振興協会	隅田八幡宮	神社人	http://jinjajin.jp/modules/newdb/detail.php?id=9451	2015/7/17
岩井芳文堂	筆の研究	岩井芳文堂豊橋の筆屋さん	http://www.tees.ne.jp/~hohbun85/iwai-hude01-000.html	2015/7/25
豊田市和紙のふるさと事務局	豊田市和紙のふるさと	小原和紙工芸作家	http://www.washinofurusato.jp/categories/artist/	2015/8/1
豊橋筆匠	豊橋筆匠	豊橋筆について	http://www.toyohashi-fude.com/hpgen/HPB/entries/4.html	2015/8/5
鳳鳴堂硯舗	鳳鳴堂硯舗	History	http://www.suzuri-houmeido.com/history/	2015/8/5
東北経済産業局	伝統的工芸品のご紹介	伝統工芸品とは	http://www.tohoku.meti.go.jp/s_cyusyo/densan-ver3/html/top_1.html	2015/8/6

参考資料

分類	資料を制作した人、団体名	資料名	制作年
パンフレット	豊田市和紙のふるさと	私たちの小原和紙	
パンフレット	一宮市博物館	硯ことはじめ～文房具のルーツをさぐる～	2011
DVD	伊勢せきや(CBC放送)	一芸一流～技ひとすじ～	2005

お世話になった方々

小原和紙工芸作家、福岡小次郎先生

小原和紙のふるさと工芸館
山内さん（左）と小林さん（右）

豊橋筆嵩山工房、伝統工芸士
山崎恒弘先生

鳳来寺硯、鳳鳴堂５代目名倉鳳山さん

ありがとうございました！！